

大東ふれんぼ帳

>4<

萌える緑

つい一カ月前、絢爛（けんらん）さを誇っていた桜花もあっけなく散って、今は葉桜。一抹の淋しさを打ち消すかのように、緑の樹冠から射し込む光は意外に強く、若葉のみずみずしさがひととき印象的である。まさに緑萌える季節である。

そこで、今回は本市の貴重な自然飯盛の緑の主役たちにスポットをあてながら「緑あれこれ」について語ってみよう。

冬に東の山並みを眺めてすぐに気がつくことは落葉樹の多さである。とりわけコナラ、アベマキ、クスギは飯盛山系の主といってもいいだろう。いずれもブナの仲間、秋にはどんぐりをつけるのでご存知の方も多

いはずである。コナラ、ク

スギは昔は燃料源として薪炭に利用され、龍間にはその名残りの炭焼窯が今も残っている。しかし、エネルギー源の変遷により、現在では一部、シイタケのほだ木として利用されているにすぎない。

このようにかつては里山の緑は一種の経済林であり、土地の人によると、現在の山の緑の主役は戦後の間もない時期に造林されたものがかなりあるとのこと。ちなみに潜在植生分布図によると、このあたりは常緑広葉樹林帯に属している。これは大昔はシイやアラカシを中心とする照葉樹

が生育していたことを物語る。従って、現在私たちの眺める飯盛の緑は厳密に言えば、本物の緑ではなく、二次林とよばれる代償

折りしも、本年は国連食糧農業機関が提唱した「国際森林年」である。人間の未来が緑の地球なくしてはありえないという理念は、

植生なのである。大阪平野の東に位置する生駒山脈、飯盛山はそれより北に走る北生駒山系の西端にある。いずれも土壌はやせて、やや酸性、西に急傾斜し植生は決して豊かとはいえない。しかも飯盛山周辺にあっては開発による自然破壊の恐れは今も去ってはいない。このような状況にあっては、飯盛の緑はかけがえのない郷土の緑に変わりはない。たとえ、自然のままの植生ではなくても、自然の植生が許す範囲内で比較的安定した代償植生、それが現在の飯盛の緑である。

今こそ郷土の緑づくりに生かされるべきである。町中の自然、街路樹も美化としてのみではなく、郷土の素顔として、市民の持続的な生存と文化の基盤となつて欲しい。

近年、緑の効用については盛んに取り上げられるようになったが、そのみに目が奪われ、生態系の中で人間が寄生者の立場にいるというところが忘れ去られていく気がする。いくら「万物の霊長」人間が文明の進歩と人間社会の発展を誇ったとしても、生物社会に生きていく限り、主役はやはり緑である。ここ一カ月は、限りなく明るい緑の生命力に驚嘆し、改めて感じたことである。



かけがえのない郷土の緑「飯盛山」